

聖和学園短期大学 スポーツ系公開講座 変遷と今後の課題 (3)

高間 章 飯田 臣 及川 佳澄 渋谷 祐子 渡辺 篤史

(キャリア開発総合学科)

I. はじめに

2005年度に聖和学園短期大学（以下本学と表記）の施設を利用し、教員や学生が指導するスポーツ系公開講座（以下スポーツ教室）を開始し、地域貢献に加えて学生のキャリア形成にも取り組み、2023年度まで19年間継続している。表1に示した2023年度のスポーツ教室は5月8日に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが2類から5類に移行され、スポーツ活動に対しての制限がなくなったこともあり順調に実施できた。筆者らはこれまでに本学のスポーツ教室の取り組みを研究紀要で報告してきた。第59号の第1報では2005年開講の健康づくり教室、2013年開講のサッカー教室について分析し、健康づくり教室は参加者の確保のための募集広報に、サッカー教室は学生スタッフの参画に課題があることが確認された¹⁾。第60号の第2報では2014年開講のダンス教室、2020年開講のバレーボール教室を分析し、ダンス教室では参加者の児童が習得したダンスを大学生と共に披露する機会としていたキャリアフェスティバルが終了することが課題と報告した。キャリアフェスティバルはスポーツ、ファッション、ミュージックを学んだ学生の成果を発表することや、ダンス教室参加児童や地域のダンス団体も大学生と一緒にステージに立つことができる地域貢献に重要なイベントであったが、一定の役割を果たしたと判断され、終了することとなった。そのため、ダンス教室内での教員・児童・学生の交流に力を入れることが確認された。バレーボール

教室は学生スタッフの参画と発育発達に合わせたボールの選択や練習メニューの工夫が必要と確認された²⁾。

近年、大学を取り巻く環境が大きく変化の中で、大学による「社会貢献」が重要な役割とされている。2005年の中央教育審議会答申「我が国の将来像」の中で「教育」「研究」に加えて「社会貢献」が追加され、2006年に改正された教育基本法では第7条において「成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」とされている。また、大学は2003年の学校教育法の改正により、第三者評価を定期的に受けることが義務付けられ、評価基準の中に地域社会との連携が取り入れられた。その結果、スポーツ系の大学はスポーツを通じた地域連携、貢献が求められ、各大学はスポーツ教室の開催や、総合型地域スポーツクラブ（以下総合型クラブ）の運営に取り組んでいる。文部科学省は身近な地域で子どもから高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好して（多種目）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）総合型クラブを推奨している。1995年に育成が開始され、2022年には創設準備中を含め全国に3,584の総合型クラブが存在している。本学のスポーツ教室は複数の種目を開講し、幼児、小学生、中学生、高齢者が参加しており、総合型クラブの要件を満たしていると考えられる。そこで本研究では第3報として2023年の活動を分析し、スポーツ教室の今後の課題と総合型クラブの設立のための課題

を見出すことを目的とした。

Ⅱ. 2023年度スポーツ教室の概要

1. 2023年度スポーツ教室の実施内容

2023年度スポーツ教室の一覧を表1に示した。サッカー教室は月1回の頻度で開催し、5月～9月と1月の計6回は土曜10:30～12:00、10月～12月の3回は木曜16:15～17:30で実施し316名（平均35.1名）が参加した。

サッカー&スポーツスクールは年会員が32名で水曜18:15～19:30で12月までに29回実施し、延べ495名（平均17.1名）が参加

した。1月～3月にも11回実施予定である。

ダンス教室は11月の日曜10:30～12:00で2回実施し、参加者は合計121名（平均60.5名）であった。

ダンスクラブは月曜18:15～19:30で12月までに27回実施し、会員は15名（4～6月9名、7～8月10名、9～10月12名、11～12月15名）で延べ303名（平均11.2名）が参加した。練習したダンスを発表する機会として8月北中山夏祭り（北中山小学校）、10月いずみ中山フェスタ（南中山市民センター）、なかやま商店街大街道市マルシェ（中山とびの

表1. 2023年度4月～12月の公開講座スポーツ教室の一覧

	内容	日程	時間帯	回数	参加人数	平均人数	スタッフ人数	費用
1	サッカー教室	5/20 (土)	10:30～12:00	9	29	35.1	教員1	無料
		6/10 (土)			41		教員1 学生1	
		7/1 (土)			41		教員1	
		8/29 (土)			39		教員2 学生1	
		9/2 (土)			49		教員1	
		10/5 (木)			16:15～19:30		23	
		11/9 (木)	24				教員1 学生9	
		12/21 (木)	24				教員2 学生8	
		1/13 (土)	10:30～12:00		46		教員2 学生2	
2	サッカー & スポーツスクール	水曜 毎月3～4回	18:15～19:30	29	会員32名 延べ495名	17.1	4月～10月教員1 11月～ 教員1 学生1	年会費 1,000円 1回 500円
3	ダンス教室	11/19 (日)	10:30～12:00	2	65	60.5	教員2 学生10	無料
		11/26 (日)			56		教員2 学生9	
4	ダンスクラブ	月曜 毎月3回	18:15～19:30	27	会員15名 延べ303名	11.2	教員2	年会費 1,000円 毎月2700円
5	バレエボール教室	8/26 (土)	10:30～12:00	3	23	22.5	教員2 学生9	無料
		12/16 (土)			22		教員2 学生11	
		2/24 (土)						
6	健康づくり教室	6/14 (水)	14:20～15:50	5	9	8.8	教員2 学生10	無料
		7/12 (水)			9		教員2 学生10	
		10/4 (水)			9		教員2 学生13	
		11/8 (水)			11		教員2 学生19	
		11/29 (水)			6		教員2 学生19	

こ公園)、11月青葉区民まつり(勾当台公園)、1月地域ダンス交流会「Let'sダンス」(聖和学園短期大学)に出演した。

バレーボール教室は8月、12月の土曜10:30～12:00で合計2回実施し、参加者は合計45名(平均22.5名)であった。3月に最後の回を行う予定である。

健康づくり教室は6、7、10、11月の14:20～15:50に合計5回実施し、参加者は合計44名(平均8.8名)であった。

2. 2022年度との参加者比較、改善について

2023年度のサッカー教室参加者の平均は35.1名で2022年度25.4名と比較して増加した。サッカー教室は学生スタッフの参画を課題として第1報で報告してきた。そのため、2022年度からは10月～12月の3回はコーチング実習の授業時間内の16:15～17:30に実施し、2023年度は8名の学生のコーチングサポートを得ている。2023年度の10月～12月(木曜日)の参加者の平均は23.7名で2022年度15.7名と比較して増加しており、平日の夕方サッカー教室も徐々に浸透していると考えられる。参加者の保護者に対してアンケート調査を実施したところ、自由記述欄にサッカー教室での学生対応を評価するコメントもある一方、子ども達同士のトラブル対応を不足する指摘もあった。学生がメインで教える場面をつくることは学生自身の経験として貴重なものではあるが、指導経験が不足しているためスムーズな進行や、トラブルへの対処は難しい部分がある。サッカー教室は幼児から小学6年生まで参加しており、年代の幅も大きく、全員に対して同じメニューを実施することが難しい。そのため、常にフォローするためには経験のあるコーチが複数必要と考えられる。今年度実施した9回のサッカー教室のうち、複数の教員で対応できたのは3回

であったため、地域のニーズに対応するにはその改善が必要と考えられた。サッカー&スポーツスクールの会員数は2022年度17名、2023年度32名で15名増加した。新規会員の多くはサッカー教室の経験者や会員からの紹介で入会している。これは普及のための月1回の無料教室から週1回程度の有料スクールに繋がる好循環が生まれていることを示している。スクールにおいても参加者の年齢幅も大きく、参加人数が増加したため、11月より有給で学生スタッフのサポートを加えることができた。学生スタッフの参画が課題とされてきたサッカー教室・サッカー&スポーツスクールであるが、スタッフ体制を整備しつつある状況である。今後の課題は常に複数のコーチ、学生でコーチングする環境を確立することである。

2023年度のダンスクラブの年会員は15名で2022年9名と比較して増加した。また、ダンス教室参加者の平均は60.5名で2022年度44.5名と比較して増加した。ダンス教室では昨年よりさらに多い人数の参加者に対して、スポーツ方法実習Ⅳ(ダンス)を履修する17名の学生が子ども達へのコーチングやサポートを行った。学生コーチは2回の教室に対してどちらか1回に参加する設定としたが、両日とも参加した意欲的な学生もいたため、コーチングスタッフは毎回10名程度を確保することができた。学生にダンス教室での子どもとの関わりについて5段階評価のアンケートを実施し、図1に示した。上手く関わられた、ある程度上手く関わられたという回答が合わせて8割を超え、具体的な回答として「積極的に分からない子たちにその子にあった教え方でできたから。」といった「教える」、「指導する」、「サポートする」といった表現で一定のコーチングを行えた感想が多かった。その一方、11.8%が2という低く評価し

た理由は「ダンスに自信がなかったから」、「子どもが苦手」といったダンスや子どもへの苦手意識を払拭できないままに、コーチングしたことを挙げた。授業ではダンスの練習だけではなく、コーチングのアプローチ方法である「指示」、「質問」、「提案」、「委譲」の内容や具体例を説明し、毎回の授業でコミュニケーションワークやマイクロコーチングを実践している。また、ダンスの歴史や特性を理解するためのミニ講義や、ダンスコーチングに必要なオノマトペを用いコーチング実践も行っている。しかし、ダンス教室で起こり得る子ども達の様々な状況への具体的なアプローチ方法や解決できた事例を紹介することが少なかつたように振り返る。今後は今回の教室でも撮影したコーチング場面の動画を見て、適切な対応についてディスカッションするなど、学生への教授法を工夫していきたい。参加者の保護者にアンケート調査を実施したところ、学生スタッフの親切、丁寧な対応が評価される一方、上手くできない子ども達へのフォローや振り付けの難易度を不満に感じる回答もあった。無料のダンス教室は年2回の限られた回数であるため、幼児から小学校6年生まで幅広い年代と60名ほどの人数を受け入れている。授業と接続することで多くのコーチングスタッフを確保できているが、それでも個々の対応は難しく、参加者全員に

対して適切なコーチングやサポートができていないことが考えられた。今後は教室の開催回数を増加させて、それぞれの回で年齢・対象を区分けすることで適切に対応していきたい。

昨年度の課題のひとつにダンス教室の発表の場となっていたキャリアフェスティバルが終了することを挙げた。今年度はその課題に対して、よさこい部、ストリートダンス部、すずめ踊り、スポーツ方法実習Ⅳ（ダンス）履修生の学生が協力し、地域ダンス交流会「Let'sダンス」を開催した。ダンス教室は27名、ダンスクラブは12名の幼児、児童が参加した。ダンスの振付内容にも工夫を凝らし、大学生と一緒に踊る場面をつくることで交流を深めることができた。また、他にも地域のチアダンスチーム HERO'S、よさこいチーム「魂響」、聖和学園高等学校舞踊&ダンス部も参加して、教育機関の運動会でも使用されることが多いよさこい曲「南中ソーラン」、「よっちょれ」では各団体のメンバーがステージ上や会場全体でダンスを通して交流することができた。開催費用は仙台市泉区のいずみ絆プロジェクトの助成費用を活用し、キャリアフェスティバルに引き続き、ステージをショーアップして実施することができた。今後の課題としてはイベント開催費用の確保が挙げられるが、学校からの資金援助を得るための工夫、県や市の助成金制度の活用や参加費用の徴収などを模索して、学生と地域のダンス交流を継続していきたい。

バレーボール教室は8月、12月の土曜10:30～12:00で現在までに合計2回実施し、参加者は合計45名（平均22.5名）となり、2022年度11.7名と比較して増加した。学生スタッフは本学バレーボール部と地域の中学生クラブチームの生徒が8月9名、12月11名で担当した。バレーボール部は今年度から

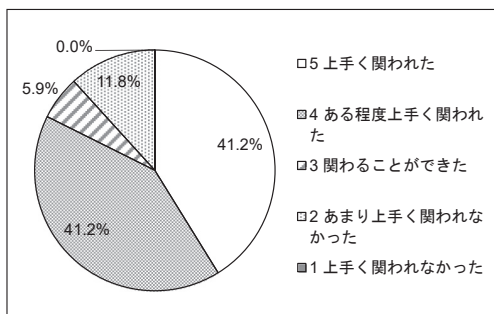


図1 子どもとの関わりへの学生の自己評価

大学とVリーグチームのリガーレ仙台がアカデミックパートナーシップ連携協定を締結したことで、仙台市バレーボール協会とも共催して地域の小学生に対してバレーボール教室を開催した。このような経験から、バレーボール教室での学生スタッフ参加やコーチングがスムーズに実行された。また、筆者が指導する中学生クラブチームの生徒もスタッフ協力をすることができた。保護者アンケートから「ぜひ、バレーボールクラブを始めてほしい。」「バレーボール教室は参加したお友達みんなが終始楽しそうに活動していた」、「バレーの習い事が中々無く、触れる機会も無かったので、今回子どもが初めて体験して楽しかった。習いたいと初めて言われて嬉しかったです。バレー教室があったら通わせたいです。」「バレーボールが楽しかったようで、バレーボールがもっと回数が増えて定期的であれば嬉しいです!」との意見があり、実施回数は少ないものの満足度が高い様子が伺えた。これまでの課題であった学生スタッフの増員と発育発達に合わせたボールの選択や練習メニューの工夫を行った成果と考えられる。

健康づくり教室は6、7、10、11月の14:20～15:50に合計5回実施し、参加者は合計44名(平均8.8名)であった。健康づくり教室は今年度みやぎ県民大学の生涯学習講座として実施し、宮城県教育委員会のHP等で広報を行うことができた。学生スタッフも授業と接続して毎回10名以上のメンバーでサポートを行った。県の予算でヨガマットやストレッチポールも購入して内容の充実に努めたが、2022年度の4回の講座の10.8名を下回ったため、健康づくり教室の参加者確保の課題は達成できず、次年度も募集広報などの工夫が必要であることが確認された。本学では介護職員初任者研修の資格が取得できること

や、「世代間交流の理論と実践」の授業で教職員と学生が地域の老人会と連携し、グラウンドゴルフや食事会などの交流を行っている。前報において、スポーツ教室参加者のきっかけは保育学科「てとて」に参加し、スポーツ教室を知ったことを報告している。健康づくり教室においても、このような循環を生み出すために学内で連携する必要があると考える。

3. 保護者へのアンケート調査

スポーツ教室参加者へ google フォームを用いてアンケート調査を行い、40件の回答を得た。回答者が今年度の受講しているスポーツ教室を図2に示した。ダンス教室27.6%、サッカー教室23.7%、ダンスクラブ21.1%、バレーボール教室11.8%、サッカー&スポーツスクール10.5%、健康づくり教室2.6%、子育て支援カレッジ「てとて」1.3%、スイーツ&ランチ講座1.3%であった。また、6割強が複数の講座を受講している。

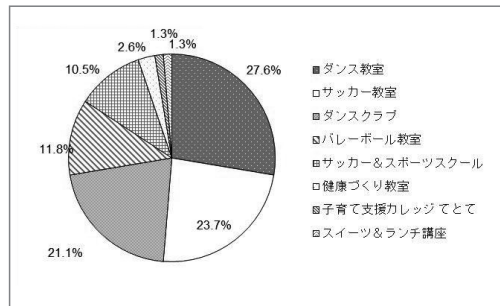


図2 今年度受講した公開講座

スポーツ教室を知った手段について図3に示した。知人からの紹介33.3%、インターネット・ホームページ24.4%、スポーツ教室担当教員からの紹介17.8%、本学制作のチラシ15.6%、町内の回覧板8.9%であった。知人からの紹介が最も多く、スポーツ教室担当教員からの紹介も含めると5割を超えている。

このことからスポーツ教室は人のつながりによって参加者を確保していることが分かった。さらに参加者を増やす手段として、紹介者に対して特典をつける等の工夫が必要と考えられた。

スポーツ教室に複数のスポーツ種目があることや製菓などのスポーツ以外の講座の認知度を図4に示した。89.7%が知っていた、10.3%が知らなかったと回答した。知らなかったと回答した人は1割を超えるため、入会時に全体の講座が紹介されているチラシを配布するなど、周知方法の工夫が必要と考えられた。

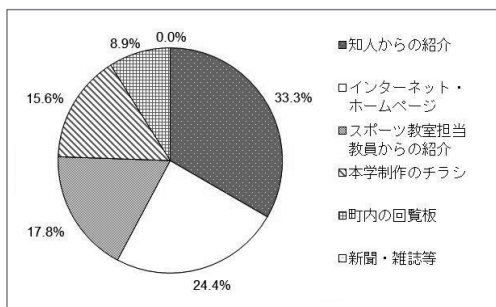


図3 スポーツ教室を知った手段

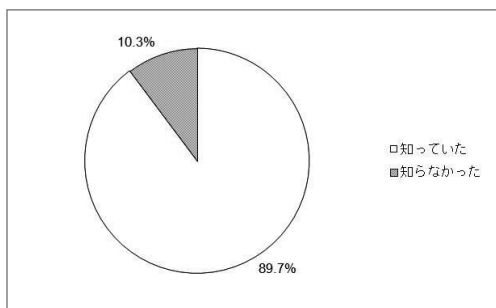


図4 複数スポーツ種目の開講やスポーツ以外の講座の認知度

スポーツ教室への参加年数について図5に示した。1年目53.8%、3年目15.4%、4年目2.6%、5年目12.8%、6年目以上15.4%であった。1年目という回答が半数以上であった。

スポーツ教室1年目の回答者は21名で無料教室のみ参加が61.9%、有料教室のみと無料・有料教室の両方参加38.1%に対して、3年以上の継続者アンケートの17名は無料教室のみ参加が11.8%、有料教室のみと無料・有料教室の両方参加は88.2%であった。このことから、開催頻度の高い有料教室は参加者の定着化に効果があると考えられた。また、自由記述では「サッカー教室の参加がきっかけとなり、現在はクラブチームに所属して、より練習に励んでいる」という回答もみられた。現在はクラブの活動スケジュールと重なるため、スポーツ教室の参加は継続されていないが、本格的にスポーツを始めるきっかけになった1例であり、スポーツ教室の体験は定着化だけでは図ることができない様々な効果を生み出していることも考えられた。

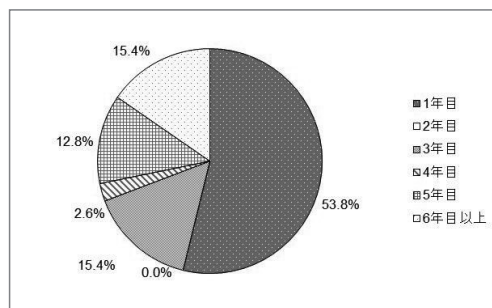


図5 スポーツ教室の参加年数

参加者が最初に受講した講座を図6に示した。サッカー教室が44.7%、ダンス教室が23.7%、ダンスクラブが18.4%、子育て支援カレッジ「てとて」が10.5%、バレーボール教室が2.6%であった。スポーツ教室ではない乳幼児を対象とした子育て支援カレッジが1割を超える結果となったが、これはこの講座がきっかけで成長や興味・関心の広がりから各種講座を受講していく好循環が生まれていると考えられる。前報においても、ダンス教室の参加者に対して過去の参加歴を確認し

た結果、スポーツ教室のみならず、「てとて」がきっかけとなっている参加者が1割強存在したことと同様の結果を示した。

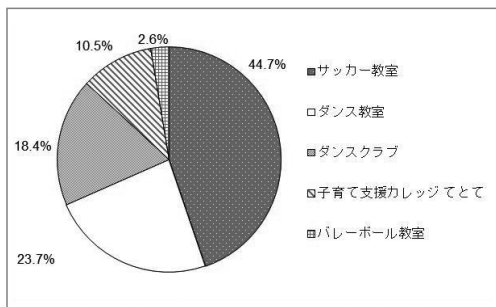


図6 公開講座で最初に受講した内容

スポーツ教室の参加によって大学の印象が変化した内容を図7に示した。大学への親近感が増した39.6%、大学への印象が良くなった18.7%、施設・設備が充実している18.7%、大学の教育内容を知ることができた12.1%、大学に対する理解が深まった9.9%、学生の皆さんが明るく親しみやすい子が多いが1.1%であった。5割強が複数回答を行っており、講座の参加により、大学への評価が高まる効果があると考えられた。

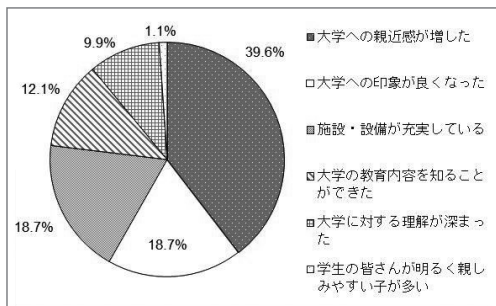


図7 大学に対する印象の変化

スポーツ教室の受講目的を図8に示した。喜び・楽しみのため14.5%、意欲を高めたい8.8%、体力の向上8.8%、自信を持たせたい7.8%、からだの動かし方を身に付けさせたい7.8%、技術の向上6.7%、コミュニケーション

の向上6.7%、交流したい6.7%、積極性を高めたい6.7%、良い指導を受けたい5.2%、生活の運動量を上げたい5.2%、家の外に出させたい4.7%、リフレッシュのため4.1%、健康づくりのため3.6%、順番を待つなどのルールを学ばせたい2.6%であった。

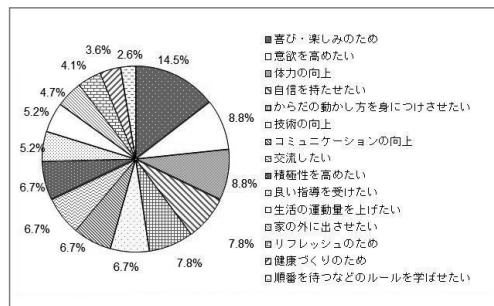


図8 スポーツ教室の受講目的

スポーツ教室に対する満足度を図9に示した。指導内容に対して満足である87.2%、やや満足である10.3%、やや不満である2.6%であった。やや不満を回答した参加者は自由記述において、振り付けの難易度が高すぎることや子どもへのフォローの不足を挙げていた。施設・用具に対して満足である82.1%、やや満足である12.8%、どちらでもない5.1%であった。申込方法・連絡に対して満足である82.1%、やや満足である12.8%、どちらでもない5.1%であった。開催日時に対して満足である64.1%、やや満足である33.3%、どちらでもない2.6%であった。安全管理体制に対して満足である84.6%、やや満足である15.4%、駐車場に対して満足である84.6%、やや満足である15.4%であった。アクセスに対して満足である89.7%、やや満足である7.7%、どちらでもない2.6%であった。内容の質、充実に対して満足である82.1%、やや満足である15.4%、どちらでもない2.6%であった。講座の豊富さに対して満足である82.1%、やや満足である15.4%、どちらでもない2.6%で

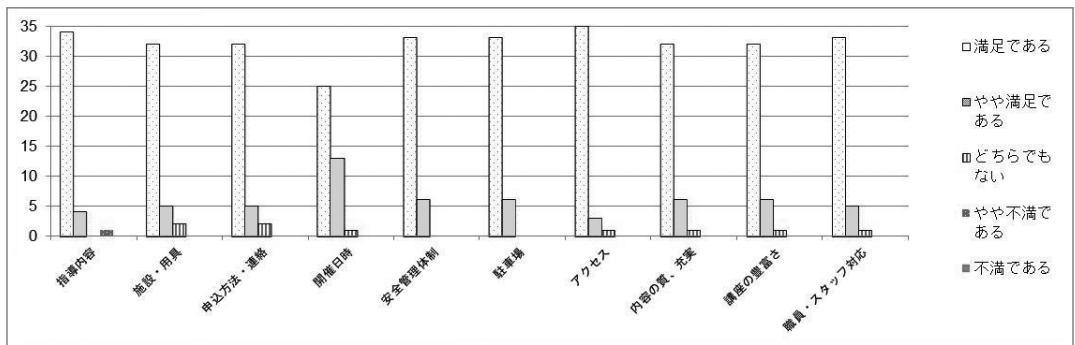


図9 スポーツ教室の満足度

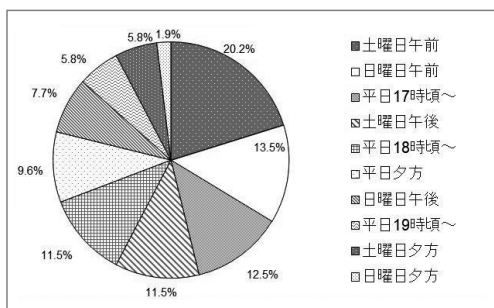


図10 参加しやすい時間帯

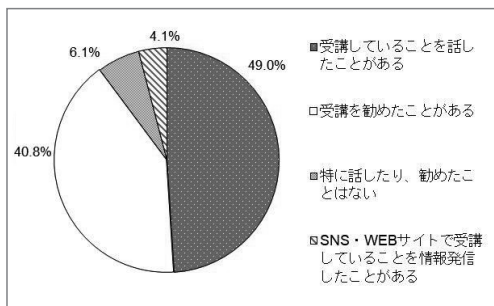


図11 スポーツ教室を他者に勧めた経験

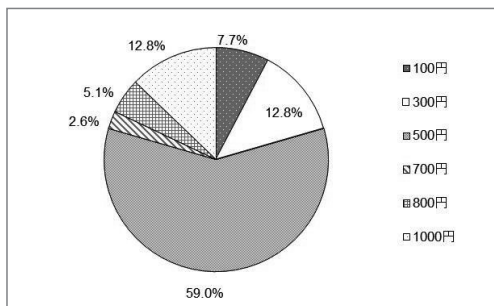


図12 無料教室を有料化した場合の適正金額

あった。職員・スタッフ対応に対して満足である84.6%、やや満足である12.8%、どちらでもない2.6%であった。開催日時以外のすべての項目は満足であるが8割を超える結果となった。

スポーツ教室に参加しやすい時間帯を図10に示した。土曜日午前20.2%、日曜日午前13.5%、平日17時頃～12.5%、土曜日午後11.5%、平日18時頃～11.5%、平日夕方9.6%、日曜日午後7.7%、平日19時頃～5.8%、土曜日夕方5.8%、日曜日夕方1.9%であった。

スポーツ教室を他者に勧めた経験について図11に示した。受講していることを話したことがあるは49.0%、受講を勧めたことがあるは40.8%、特に話したり、勧めたことはない6.1%、SNS・WEBサイトで受講していることを情報発信したことがあるは4.1%であった。

無料教室を有料化した場合の適正金額について図12に示した。500円が59.0%、300円と1,000円が12.8%、100円が7.7%、800円が5.1%、700円が2.6%であった。保護者アンケートの自由記述では「土日なので難しいかもしれませんが、スタッフの学生さんが1人だったので、もう少し人数がいた方が子ども達に目が届きやすいかと思いました。」というスタッフの確保が課題とされる意見もあ

り、教室を有料化することで、その利益を生かして有償ボランティアを募り、スタッフ確保に繋がると考えられる。

4. 総合型地域スポーツクラブについて

宮城県では総合型クラブの創設や育成を促進するために「みやぎ広域スポーツセンター」という名称で公益財団法人宮城県スポーツ協会が県から受託して業務を行っている。宮城県スポーツ推進計画では、県民が主体となり地域のスポーツ環境を整備していくため、総合型クラブを県内全市町村に設置することを目標に掲げている。令和5年4月現在、宮城県には24市町に52の総合型クラブが設立されている。総合型クラブは子どもから高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好して（多種目）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）ことが特徴である。本学のスポーツ教室の参加者は多世代であり、12月に宮城県スポーツ協会との総合型創設のためのヒアリングの際に、要件を満たしていることを確認している。仙台市は総合型クラブの創設や運営に助成金を支給しているが、選定条件として、活動種目が2種目以上で、活動が年間を通して概ね週1回以上継続的に行われ、さらに会員数が概ね100名以上という内容がある。有料のサッカー&スクール、ダンスクラブは年間を通して毎週活動しているため、種目数や頻度は要件を満たしている。会員数は合計で47名であるが、無料教室に参加している人数を加えると人数についてもクリアできる可能性がある。先行研究によると、総合型クラブを大学に設置する意義は、学生の教育と地域への貢献の2点に集約される³⁾。教育面の意義としては学生のアクティブ・ラーニングとしての学びの場となり、地域貢献の意義としては大学資源の地域への開放が

地域のニーズを満たすことに繋がる。さらに、大学の認証評価では地域貢献活動の評価項目もあるため、それに対しても有効であると考えられる。馬場ら（2008）は大学による総合型クラブを運営する課題について①大学によるクラブの位置づけ、②財源確保、③大学内の施設の確保、④教員・職員・学生の関わり、⑤地域住民との関わり、⑥既存団体との軋轢、⑦行政機関との良好な役割分担、⑧誰のための総合型クラブか、の8点を挙げている⁴⁾。現在のスポーツ教室の活動状況において、有料教室はクラブの活動趣旨を説明し、体験をしてもらい入会申込書提出、年会費徴収といった手続きがあるが、無料教室は参加申込のみである。それでは子ども達や保護者がクラブのビジョン、フィロソフィーや活動内容を理解して参加している訳でなく、クラブの概念や位置づけがなされていない。無料教室ではサポート体制の充実も課題であるため、有料化して有償ボランティアを募ることも検討している。有料とした場合に会員制度をつくり、入会者は1教室あたりの参加料が減額されるような特典を設けることを必要であろう。このことにより、単発教室の参加者も入会者となり、クラブ加入者増加や財源確保に繋がると考えられる。

埼玉県の武蔵丘短期大学では総合型地域スポーツクラブ「武蔵丘スポーツクラブ」を2011年に設立し、ゴルフ教室、ヨガ教室、健康づくり事業、指導者養成事業、スポーツイベントを開催している。運営費用は会費・事業収入だけでなく、行政や財団の受託収入、寄付金、協賛金を活用している。2012年にはtotoの助成費用を獲得し、様々な事業を展開しNPO法人の認証を受けて、現在は吉見町と中学校部活動支援などの連携事業に取り組んでいる^{5) 6)}。このように地域に根差した活動を行っていくためには、大学の施設や

知的財産などを活用しながら、資金面で独立して運営できるように行政や様々な団体・個人との連携が必要と考えられる。本学スポーツ教室もこの例に習い、運営費用の確保や行政、外部団体との連携を課題に挙げていきたい。

今後も先行研究や事例を参考にして、本学の状況に適した総合型クラブを創設できるように研究を重ねていきたい。

Ⅳ. まとめ

本研究では第3報として2023年の活動を分析し、スポーツ教室の今後の課題と総合型地域スポーツクラブの設立のための課題を見出すことを目的とした。2023年度は前年度と比較して、サッカー教室、スポーツ&サッカースクール、ダンス教室、ダンスクラブ、バレーボール教室の参加者が増加した。一方、健康づくり教室の参加者数は減少した。健康づくり教室はみやぎ県民大学の講座にも認定され、広報活動等を強化できたが、参加者増には繋がらなかった。今後も学内の教職員との連携改善を試み、集客方法の工夫を重ねていきたい。保護者アンケートではスポーツ教室により大学への親近感が増すことや、指導内容等の満足度が高いことが確認された。難易度の設定やサポート体制の不足の指摘があったため、そこを次年度の課題として改善していきたい。総合型クラブの創立に関して、現在の開催状況で要件を満たしている状況ではあるが、助成を受けるためには会員数が不足しているため、無料教室の参加者の会員化が必要である。さらに行政や外部団体と連携した運営費用の確保を次年度の課題としていきたい。

今後もスポーツ教室の課題を明確にして、学生のキャリア形成と地域貢献を実践していきたい。

Ⅳ. 参考文献

- 1) 高間章・渋谷祐子・渡辺篤史, スポーツ系公開講座 変遷と今後の課題 (1), 聖和学園短期大学紀要, 83-89, 2022.
- 2) 高間章・及川佳澄, スポーツ系公開講座 変遷と今後の課題 (2), 聖和学園短期大学紀要, 157-163, 2023.
- 3) 炭谷将史 (2014) 大学を核とした地域密着型クラブの意義と課題: 大学側の視座からの考察, 聖泉論叢, 21: 25-34.
- 4) 馬場宏輝・丸山富雄・仲野隆士・永田秀隆・中房敏朗・栗木一博・柳久恒・石丸出穂 (2008): 大学を核とした総合型地域スポーツクラブの創設・育成・運営の可能性について: 仙南広域スポーツ研究会の活動報告から, 仙台大学紀要, 40 (1), 111-123.
- 5) 太田あや子・福島邦男・桂和仁, 武蔵丘スポーツクラブの設立と活動報告, 武蔵丘短期大学短期大学紀要, 19: 123-129, 2012.
- 6) 太田あや子・福島邦男・桂和仁・高橋琴美・岡崎英規・田中忍, 武蔵丘スポーツクラブ2年目の活動報告, 武蔵丘短期大学紀要, 20: 43-48, 2013